

名篇御伽草子

西沢正二著

笠間書院 92



西沢正二（にしざわ まさじ）

1966年（昭和41年） 東北大学文学部国文学科卒業

1970年（昭和45年） 東京大学大学院人文科学研究
科修士課程修了

その後、同博士課程、高知女子大学講師を経て

現在 弘前大学人文学部助教授

専攻 中世国文学（主として御伽草子・歴史物語）

主著 「影印校注古典叢書 16 お伽草子」（新典社
共著）その他

住所 〒036 弘前市松原東 2 丁目15—30

笠間選書92 名篇御伽草子

昭和53年 4 月25日初版第 1 刷発行

定価 1000円

—検印省略—

著者 西沢正二◎

発行者 池田猛雄

印刷 大文社印刷所

製本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-46

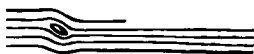
電話03-295-1331(代) 振替東京1-56002

書籍コード 1391-953092-0924

名篇御伽草子

西沢正二 著

笠間選書 92



笠間書院

名篇 御伽草子 目次

凡例	五
解説	七
三人法師〔一名『三人懺悔草子』〕	一一
ささやき竹	五九
おようの尼	九二
福富草紙〔一名『福富長者物語』〕	一二〇
物くさ太郎〔一名『おたかの本地』〕	一四二
あきみち	一七〇

凡 例

一、本書は、御伽草子の中から、比較的高い評価を受けている作品、あるいはすぐれた異色性を有する作品ばかり六編を精選し、解説・頭注・本文を収めた。

二、各編の底本とした伝本は、次の通りである。

『三人法師』 内閣文庫蔵本（写本）

『ささやき竹』 国立国会図書館蔵本（宝永二年刊本）

『おようの尼』 東京大学付属図書館蔵本（奈良絵本）〈影印校注古典叢書16『お伽草子一』による〉

『福富草紙』 宮内庁書陵部蔵本（写本）

『物くさ太郎』 国立国会図書館蔵本（写本）

『あきみち』 国立国会図書館蔵本（奈良絵本）

三、読解の便を考えて、次のような処置をとったが、本文は底本に復元できるように配慮した。

(1) 底本にできるだけ忠実に翻刻したが、本文に句読点・濁点を添え、適宜漢字を当て、不足している送り仮名を補って・印を付し、さらに会話・引用文には「」をつけた。

(2) 仮名づかいは、歴史的仮名づかに改め（ただし漢字を当てた場合はその限りでない）、当て字・変

体字・誤字等は、通行の字体に直したが、底本が復元できるように、それらは「振り仮名」や「振り漢字」として残した。

(3) 本文につけた「振り仮名」のうち、カッコ等の付いていないものは、漢字を当てた場合であるが、() の付いているものは、底本の漢字に振った仮名であり、^ v の付いているものは、底本の漢字に振られている仮名である。

(4) 一般的に御伽草子の本文は精確さを欠き、誤脱が多いという事情を考慮して、他の伝本等で補った場合がある。その場合は、補った部分を「」に入れ、その旨を明示した。なお、校異は、スペースの関係上、主要なものに限って、頭注に掲げた。

四、本書の頭注及び本文の作成にあたっては、日本古典文学大系『御伽草子』(市古貞次氏校注)、及び『鑑賞日本古典文学 御伽草子・仮名草子』(市古貞次・野間光辰両氏校注)によるところがすくぶる大きい。深謝するものである。

五、底本の翻刻については、国立国会図書館、宮内庁書陵部、国立公文書館内閣文庫、及び東京大学付属図書館のご高配をいただいた。

解 説

御伽草子とは、婦女童幼を対象とした「お伽話」の類ではなく、南北朝時代から室町時代を経て江戸時代初期に至る、およそ三百年ほどの間に成立し、各階層に広く享受された短編の物語草子の総称である。周知のごとく、御伽草子という名称は、江戸時代の中頃（寛文・享保年間頃という）、大坂心齋橋の書肆、柏原屋渋川清右衛門が出版した、『文正草子』等、二十三編の物語草子に付された叢書名に由来するとされている。したがって、御伽草子という名称は、狭い意味においては、渋川板の二十三編に限定されるのであろうが、現在ではもっと広い意味で、南北朝期～江戸初期の期間に成立した短編の物語草子の総称として用いられている。この広義の御伽草子は、従来、近古小説、室町時代小説、室町時代物語（室町物語）、中世小説などの種々の名称によって呼ばれてきたが、現在でも必ずしも一般的・共通的に認知された用語とはなっていないかのである。本書では、従来の慣用に従って、御伽草子という名称を、室町時代を中心とする時期に成立した短編物語草子の総称として用いておきたい。

ところで、渋川板御伽草子は、奈良絵本を模した絵入りの横本で、めだたい内容のものが多くこともあって、出版当時から婦女童幼層を中心にかなり広く享受され、現代に至るまで御伽草子の代表的

な存在であるかのごとくみられてきた。だがしかし、『文正草子』をはじめとする二十三編の物語草子の多くは、三百編をはるかに越えている多種多様な御伽草子群の中に置いてみると、その典型的あるいは代表的な作品とは必ずしも言えないようである。そのことは、おそらく、渋川板御伽草子が、その成立時期からみて比較的新しい作品であるらしいこと（かなりのものが江戸時代に入ってから作品であるという）、また、その内容からいっても、かなり便宜的に選定されたいらしい叢書であることと、深く関わっているにちがいないと思われる。本書では、従来の二十三編中心主義という享受史にとられず、短編の物語草子としての高い評価を獲得している作品、あるいはすぐれた文学的特徴を内在させている作品のうち、比較的著名な六編の物語草子を選んで収録した。この試みは、今後の御伽草子研究が、従来における二十三編中心主義の呪縛から解放された自由な方向で進められることを切に願うものである。

さて、御伽草子は、南北朝時代から室町時代を経て江戸時代初期に至る、社会変動の激しい時代を背景にして成立し、種々の階層の人々に享受されたものゆえ、従来の王朝物語文学等とは異なった多様な特徴をもっている。

① 多種多様性

登場人物は、公家をはじめ、僧侶・武家・庶民などの各階層に及び、舞台も、京都ばかりでなく、地方にも広がっている。また、内容は、恋愛中心でなく、さまざまな要素が複雑にからみあった多様さを有している。

② 短編性・説話性

従来の物語が心理描写などによる情緒性を中心としていたのに対して、御伽草子は事件の興趣を概念的に描いているという意味で、説話的・短編的な性格をもっている。この短編性という点では、御伽草子の多くが絵をともなった絵巻・絵本の形態であったという事情と関わっている。

③ 絵画性・芸能性

御伽草子は、絵巻・奈良絵本・絵入り本など、絵画をともなっているものが多く、文学性と絵画性との相関的視点も必要であると言えよう。また、御伽草子のうちのかんりのものが、民間伝承や語り物などにつながりをもっており、芸能性という観点から考えていく必要もある。

④ 啓蒙性・教訓性

御伽草子は、仏教唱導と関わって成立したとみられる作品がかなり多いことから、仏教を中心とした宗教性を有し、また教訓性も濃厚である。加えて、事物の故事来歴や物尽くしなどの知識を並べた作品も少なくなく、庶民などに対する教育的な意味をもち、概して啓蒙性をも有すると言えよう。

ところで、御伽草子は、現在のところ約三五〇編ほどが知られているが、未紹介のものを含めると四〇〇編を越えるものとみられる。このような多数の御伽草子の整理と分類は、従来においてさまざまに試みられてきたが、現在では、市古貞次氏が示された、作品の世界（主人公）を基準とする、次のような分類方法が広く用いられている。

- ① 公家に関するもの（公家物）
- ② 僧侶（宗教）に関するもの（僧侶物）
- ③ 武家に関するもの（武家物）
- ④ 庶民に関するもの（庶民物）
- ⑤ 外国・異郷に関するもの（異国物）
- ⑥ 異類に関するもの（異類物）

右の①～⑥のうち、数量的（作品数・伝本数）には、①公家物と②僧侶物とが他をしのぐが、内容的には、②僧侶物と④庶民物とが、中世文学・庶民文学としての御伽草子の中核をなすものと言えよう。本書に収録した六編の物語草子は、いずれもかなり巧妙な短編小説的構想を有し、御伽草子という言葉にイメージされる婦女童幼性を拒否するかのような作品、あるいは中世から近世初期頃の庶民的精神を如実に反映している作品、あるいは中世の苛酷な現実の一角を鋭く切り取ってきたような作品などであり、「名篇御伽草子」の名に恥じないものであるように思われる。

※主要参考文献

- 『室町時代小説論』 野村八良 昭和十三年
- 『中世小説の研究』 市古貞次 昭和三十年
- 『戦国乱世の文学』（岩波新書） 杉浦明平 昭和四十年
- 『下剋上の文学』 佐竹昭広 昭和四十二年
- 『お伽草子と民間文芸』 大島建彦 昭和四十二年
- 『民話の思想』 佐竹昭広 昭和四十八年

三人法師〔一名『三人懺悔草子』〕（僧侶物）

〈成立時期〉

楠木正儀が足利氏方へ降参したのが応安二年（一三六九）で、その六年後に篠崎が故郷に立ち寄ったことが物語中に見えている点から、永和元年（一三七五）を上限とし、『時慶卿記』に物語名と推定される「三人僧」という書名が見える慶長十年（一六〇五）を下限とする期間であるとみられる。従来およそ室町中期頃の成立と考えられてきたが、あるいは室町末期頃の成立とも推測される。

〈作者〉

不詳。従来の作者説として最も問題にすべきは、「三人法師を最終的に作品として定着させたのは、没落貴族や僧侶をふくめた京の町衆である」といつてよからう。」という、桜井好朗氏の推測説である。しかし、現在の資料関係からみて、『三人法師』の作者と町衆とを直接的に結びつけてしまうのは、いささか短絡的であるといわざるをえないであろう。やはり、『三人法師』の作者は、その素材が高野聖の伝承と深く関わっていることから、高野聖を含めた広い意味での僧侶・隠者あたりであると考えておくのが妥当なのではないだろうか。

〈素材・出典・類話〉

従来において、次のような種々の説話・物語が指摘されている。(◎印Ⅱ関連性が濃厚であると認められるもの。○印Ⅱ若干の関連性が推測できるもの。△印Ⅱ関連性は不明であるが、類話と認められるもの。)

① 第一話(悲恋遁世談)

『平家物語』の滝口横笛説話(○) 御伽草子『横笛草紙』(○) 御伽草子『車僧』(△)

② 第二話(悪人発心談)

『沙石集』巻十の七「悪ヲ縁トシテ発心シタル事」(◎) 『高野通念集』巻五「誓願院」の

項(○)

③ 第三話(親子恩愛談)

『吉野拾遺』下巻の右馬允行繼遁世談(◎) 『信生法師集』(◎) 『大和物語』百七十三

段「五条の女」(○) 御伽草子『為世草子』『朽木桜』『西行』(いずれも△) 謡曲『水無瀬』

『土車』(いずれも△) 説経節『刈萱』などの刈萱説話(△)

右に列挙した説話・物語のうち、『三人法師』の素材・出典としては、一応◎印のものが想定されるが、○印や△印などの類話の広がりを見ると、それらのものが直接的に作品の形成に関わったか否かは、容易に判定できないように思われる。そして、『三人法師』が、特に第三話を中心に広い範囲の類話をもつこと、構想的に語り物的特徴を有することなどを考慮すると、あるいは、その素材としては、右に列挙した具体的な作品に関わるような高野聖たちの伝承とのつながりを考えるのが妥当であると言えるのではないだろうか。

〈内容・特色〉

僧侶物に分類される『三人法師』は、三人の僧がそれぞれの発心遁世の由来を語り合うという座談会形式の構想によって、高野聖の生活と思想が物語化された異色の作品で、高野聖の文学の代表作とみられる。

三人の僧が一所に相会して語り合うという、いわゆる座談会形式の構想は、よく知られているところでは、『源氏物語』の「雨夜の品定め」や、『大鏡』等の鏡物の伝統を継承し、また僧侶の座談という点では、「北野通夜物語」(『太平記』卷三十五)や『三国伝記』卷第四「三人同道僧俗愛智川ノ洪水ヲ渡ル事」などとの関わりの中から生み出されたものであろう。だが、『三人法師』の構想は、それらの座談会形式を用いた文学の伝統を継承しながらも、三話それぞれがもっている異質性と相関性を巧みに生かして、一つの有機的な統一を示し得ている点で、注目すべきものであるように思われる。

高野聖については、五来重氏『高野聖』に譲るとして、ごく一般的な理解において、高野聖とは、高野山周辺の別所に隠遁し、念仏信仰や浄土思想などの影響のもとに、回国修行を行ない、勧進唱導に従った聖であったという。そうした勧進唱導活動の中から生み出された高野聖の文学としては、滝口横笛説話(『平家物語』『横笛草紙』等)、荒五郎発心談(『沙石集』『三人法師』等)、荻萱説話(説経節『荻萱』等)が広く知られているが、それらの中でも、『三人法師』は、さまざまな意味で、高野聖の文学の代表作であると言えよう。したがって、『三人法師』の文学的意味は、世俗の巷から宗教的世界へ入っていった高野聖たちの生活と思想との関わりの中で、問い直される必要があるように思われる。

〈伝 本〉

『三人法師』の伝本は、(一)刊本系諸本、(二)天理本(絵入り写本)、(三)天保本、との三類に大別できるが、(一)の諸本が比較的古態を残しているのに対して、(二)及び(三)の諸本は、増補本・改作本であろうと推定される。本書では、(一)の諸本の中で、より古態を残しているとみられる内閣文庫蔵写本を底本とし、同系の史籍集覧本(『史籍集覧』所収 底本は神宮文庫本の再写本、「史籍本」と略称)、東京大学付属図書館蔵寛永頃丹緑本(「刊本」と略称)、異系の天理図書館蔵絵入り写本(外題『荒五郎発心記』、「天理本」と略称)、市古貞次氏蔵天保本(古典文庫『未刊中世小説一』による。)などを参照した。

次に、底本とした内閣文庫本の書誌を簡単に記しておく。

・写本一冊、タテ23・5センチ、ヨコ16・7センチの袋綴本。

・表紙は薄褐色で、左上に「三人法師 全」と書き題簽がある。

・丁数は四十六丁、行数は八行。奥書等はないが、「昌平坂学問所」「内閣文庫」「元治甲子」等の印がある。

〈参考資料〉

1 『平家物語』巻第十「横笛」

平重盛に仕える滝口武士の斎藤滝口時頼は、建礼門院の女房横笛を最愛していたが、女の身分が低いのを理由に父に結婚を強く諫止されたことから、十九歳で世をはかんで出家して、嵯峨の往生院に隠棲してしまう。横笛は、時頼を尋ねめぐねて、ようやく彼の誦経の声を探しあてて、道心堅固

な時頼は、人ちがいだといって絶対に会わず、その後彼女を避けて高野山へ逃れた。再会の望みをまったく絶たれた横笛は、苦悶のすえに出家し、奈良の法華寺でとうとう死んでしまった。滝口入道は、人づてにその事を聞いたが、高野聖としていよいよ信心深く修行に専心した。(覺一本による)

2 『沙石集』卷第十本「悪を縁として発心したる事」

洛陽に貧しくして世を渡る者ありけり。妻、夫に言ひけるは、「かく貧しく心苦しき世間、堪へ忍ぶべくも覚えす。人のせぬ事にもあらず。強盜・引剝ひづばしもして、我をもして養ひ給へかし。」と言ひけれども、「人の貧しきは常の事なり。いかゞさやうのわざをばすべき。」と言ふに、妻、恨みくねり、うち泣きなどして、「さらば暇いとまをたべ。いかなる人をもたのみてすぎん。」と言ひける時、さすがに志もあさからざりけるまゝに、内野の方へ行きてうかがひける程に、日の暮れ方に、女人の、女童めわらは一人具したる、通りけるを、折節人も見えざりければ、走り寄りて、打ち殺して、二人が着物をはぎて帰りぬ。血付きたる小袖どもを、「これこそ、しかくの事してまうけたれ。」とて、妻に取らせければ、「さこそ言ひしかども、かはゆき事かな。」なども言ふべきに、笑みまげて、よにうれしげなる顔気色なり。あまりにうとましく覚えければ、日ごろの情けも志もわすられて、やがてさし出でて、もとどり押し切りて、ある僧坊にて出家して、高野へのぼりぬ。さて一筋に後世の勤め怠らず、よしなく殺しゝ罪ふかく覚えて、かつは後世をも弔ひけり。

ある時、同じやうなる入道、語らひ寄りて物語しけるは、「御発心の因縁ゆかしく、誰も申さむ、仰せられよ。これは都に住み侍りしが、嘆く事ありて、住みなれし都、心とゞまらず、あくがれ出で